

## 晩清洋務運動史論

本村, 正一

<https://doi.org/10.15017/2339109>

---

出版情報 : 史淵. 29, pp.1-29, 1943-09-20. 九州帝国大学法文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 晚清洋務運動史論

本 村 正 一

一

清朝の中葉乾隆五十八年（西紀一七九三年）、當時の新興資本主義國イギリスは新たなる貿易市場を東亞に求むべく、使節マカートニー卿を支那に派遣して來た。その要求する通商の自由は清朝廷の聽す所とはならなかつたが、その時英國王に與へた勅書の中に「天朝自開闢以來。聖帝明王垂教創法。四方億兆率由有素。不敢惑於異說」と乾隆帝は宣言してゐる。かゝる獨善的な中華の觀念は勿論尊大な專制皇帝だけのものではない。それは當代支那の知識人に共通な世界觀歴史觀であり、數千年來の歴史の中に培はれ來つた確固たる信念であつた。しかしそれから僅か半世紀を経た頃には、支那の識者達は彼らがその中に安住し來つた世界觀や歴史觀を根柢から動搖せしむる如き激しい嵐に直面しなければならぬ。それは西歐資本主義列強の市場開拓への制止し難き欲求が支那に對する武力的征服を決意せしめるに至

つたからであり、その最初の打撃は阿片戦争とその結果の南京條約の成立（道光二十二年、一八四二年）として知られる。それが興へた所の支那社會の爾後の苦悶がいかに廣汎にして且深刻なものであつたか、その全貌を茲に説いて盡すことは容易ではないが、先づ第一に列強の武力侵寇の端を開いたことがあげられる。歐米列強の如き進歩せる兵器と訓練されたる軍隊を有せざるが故に支那は列強の武力侵寇に對抗し得ず、従つて列強は自己の要求を貫徹するに最も有効なる手段として、その要求が國際間の法的又は慣例的に正當なる場合にせよ、且又支那の微弱なるが故に不當に領土・主權侵略の欲求を刺激された場合にせよ屢々武力を行使するに至つたのである。例へば咸豐七年（一八五七年）より同十年（一八六〇年）に及ぶ英佛聯合軍の廣東長江北京侵寇、露西亞の滿洲及び新疆省侵略、佛蘭西の印度支那併合（光緒十三年、一八八七年）、日本の琉球併合（同治十一年、一八七二年）と臺灣出兵（同治十三年、一八七四年）、及び日清戦役に至る迄の朝鮮を繞る日清間の繼續的紛争等の如きである。第二に列強經濟勢力の進出發展であつて、阿片輸入額は阿片戦争十五年後には戦前の約二倍七萬箱に増加したが、特に顯著な輸入増大率を示したのは列強の進歩せる機械工業生産による商品部門である。其の大宗は英國綿製品であつて、同治九年（一八七〇年）に於けるその輸入額は綿絲一億一千六百萬ポンド、綿布三億九千七百萬碼に達してゐる。<sup>(三)</sup>條約の規定により海關稅率は輸出入商品の從價五分と定められ、又外國商品は海口に於て關稅率の半即ち二分五厘の稅（半子口稅）を納めて内地釐金に代ふる特典を賦與され、以て列強の對支商品輸出發展の趨勢を促進したのであるが、未だ手工業の段階に在り而も過重な釐金を負擔しな

ければならない土産商品は到底これと對抗して販路を維持することは出来なかつた。その結果は輸入超過の漸次的増大と農村家内工業の衰頹であり、舊來の産業經濟に致命的打撃を與へた。加ふるに支那の對外貿易及び沿岸長江海運業は列強の手中に獨占され、鑛山開發鐵道電信敷設の利權もその要求する所となる始末である。主要開口地には租界が設定され、外人は治外法權を獲得し、基督教布教の自由が認められ、以て外國勢力の侵入を助長したのである。

斯くの如きが阿片戰爭以來十九世紀後半期に於ける情勢であつた。李鴻章は「籌議海防摺」に時勢の急激なる變轉を疏して云ふ、

歷代備邊多在西北。其強弱之勢客主之形皆適相埒。且猶有中外界限。今則東南海疆万余里。各國通商傳教來往自如。磨集京師及各省腹地。陽託和好之名。陰懷吞噬之計。一國生事諸國構煽。實爲數千年來未有之變局。輪船電報之速瞬息千里。軍器械事之精工力百倍。礮彈所到無堅不摧。水陸關隘不足限制。又爲數千年來未有之強敵。

一切の情勢は支那の軍事的政治的經濟的自主權の喪失と、列強への從屬化が急速度に進行しつゝあることを明確に示してゐた。憂ふべきはそれのみではない。國內には太平天國亂の終結後も叛亂絶えず、官紀の弛緩、官場の腐敗、財政の破綻は對外情勢の危機と相俟つて深刻な社會的政治的不安を形成したのである。

斯くの如き内外情勢に直面して特に識者の憂慮する所となつたのは、云ふ迄もなく列強の武力侵寇に

基く政治的經濟的自主權の喪失である。外寇を退けることこそ先づ喫緊の問題であらねばならない。その方法は如何。李鴻章は「籌議海防摺」に論じて云ふ。

外患之乘變幻如此。而我猶欲以成法制之。譬如醫者療疾不問何症概投之以古方。誠未見其効也。

又云ふ。(同上)

然則今日所急。惟在力破成見以求實際而已。

「求實際」とは何の謂ひであるか。彼は云ふ。

彼方日出其技與我爭雄競勝。掣長較短以相角而相凌。則我豈可一日無之哉。自強之道在乎師其所能奪

其所恃耳。(籌議製造輪船未可裁撤摺)

又胡燏棻は「條陳變法自強疏」に疏して云ふ。

今日即孔孟復生。舍富強外亦無治國之道。而舍倣行西法一途更無致富強之術。

西法を倣行すること即ち西歐列強を範としてその長所を采取し、彼の「所能所持」を以て我の「所能所持」とすることが富強を致す術であり、つまり自強の道だと云ふのである。

かくして西法に倣つて富國強兵を實現しやうとする洋務運動が同治初年より日清戦役後に至る四十餘年に亘つて展開されるのであるが、その過程に於いてこの支那の近代化への方向を決定的ならしめたものは太平天國亂であつたと考へる。この亂に於いて太平天國軍が上海地方を侵すに及び、英吉利佛蘭西等列強は太平天國に反對の立場に立ち、政府軍に各種の軍事的援助を提供した。その著名な例に所謂常

勝軍の存在があげられるが、ともかく太平天國軍に最後の決定的打撃を與へ此れを壊滅せしめたのは、實に列強の提供せる精銳な近代兵器の威力に外ならなかつた。この事實は郷勇軍を率ひて太平天國軍と鬭争せる漢人官僚達に西歐自然科學の發達と機械兵器の優秀性を切實に認識させる結果となり、彼等を驅つて西歐科學の採用、軍備産業の近代化へと進ましめることとなつたのである。曾國藩・左宗棠・沈葆楨・劉坤一・劉銘傳・彭玉麟等の郷勇軍の將領が何れも洋務論者であり、特に常勝軍とその統領たる米人華爾 Wald、英人戈登 Gordon と終始緊密な關係を有つた李鴻章が洋務運動最大の指導者であつた事實は、此の間の事情を明白に語つてゐる。更にこの内亂に於いて太平天國軍と正面對峙して鬭争しこれを打倒したのは郷勇軍及び團練を率ひた此等漢人官僚紳階級であつて、當然亂後に於ける官紳階級は清朝政權の支柱たると共に事實上の支那の支配者として、國內政局を擔當すべき主動的地位を獲得するに至つたのである。従つて同治以後富國強兵論は彼らの間にその直接の體驗を通じて決定的な輿論となると共に、彼らの掌中にその實踐の指導權が握られ活潑な運動が展開されることとなつたのである。李鴻章が洋務運動の殆ど全貌を代表する最大の指導者として登場したのも、彼の洋務に關する多大の經驗知識と、實際政治家としての豊富な稟質と卓越せる手腕とに因ること勿論大であるが、又一に漢人官紳階級の軍事的政治的勢力を統合せる中樞的存在としての比類なき聲望閱歷と蔚然たる政治的實力とに因るものである。

註 (一)。東華錄

註 (一)(二)。平凡社「世界歴史大系」

二

同治三年（一八六四年）太平天國亂が終結するに及んで、緊迫せる内外情勢に對應して富國強兵を達成すべく、曾國藩・左宗棠・李鴻章等を盟主とする漢人官僚の間に澎湃として改革論が提起されたのであるが、彼らによつて富強の根本として採り上げられた問題は何であつたか。李鴻章は國防充實の急を強調して云ふ。

惟臣粗識夷情。默籌時勢（中略）必從籌餉練兵製器三端下手。（籌議天津設備事宜摺）

彼の洋務論は同治十三年に上つた「籌議海防摺」に略その要旨を盡すのであるが、夫れに於いて問題とされてゐるのは矢張り軍備充實と國防強化とである。即ち練兵簡器造船籌餉の各條に陸軍の再建と訓練、鎗礮・水雷・礮子・火藥等の製造、輪船及び鐵甲船の建造等の詳密な建議を試みてゐるのであるが、特に注目されねばならないのは、國際情勢及び國內の諸條件特にその財政負擔力の薄弱なる點より考慮されたる國防の重點を東南海疆に置き、西北邊防を一時犠牲とするも東南海防に主力を傾注す可しとの見解を強調せることである。とは云へ彼の眼界は軍備のみに限られてゐたのではない。軍備建設に要する巨費の籌し難きに由り、財政經濟政策を論じて云ふ。

現在丁漕課稅正供之外。添出捐輸釐金二款。百方羅掘仍不足用。捐輸所得無幾。流弊甚大。而內地釐

金又爲半稅所紓。如銅鐵羽呢洋布等類皆關民生日用。洋船轉運迅捷輸納又僅半稅。於是奸民包攬冒騙。大宗貨物皆免完釐。因稅則載在和約無可加議。以至彼此輕重懸殊。商民交困。叢爵淵魚之喻何堪設想。丁日昌擬設廠造耕織機器。曾國藩與臣疊奏請開煤鐵各礦試辦招商輪船。皆爲內地開拓起見。蓋既不能禁洋貨之不來。又不能禁華民之不用。英國呢布運至中國每歲售銀三千余萬。又銅鐵鉛錫售銀數百万。於中國女紅匠作之利妨奪不少。曷若亦設機器自爲製造輪船鐵路自爲轉運。但使貨物精華與彼相埒。彼物來自重洋。勢不能與內地自產者比較。我利日興則彼利日薄。不獨有益釐餉也。(籌議海防摺)

列強の對支商品輸出の急激なる發展とその結果齎らされる所の土產商品の販路の喪失と内地手工業の衰頹、商工業者及び農村の困窮、貨幣の流出、釐金收入の減少等の不可避的諸情勢に對應するには、機械による製造工業を興し、礦山を開發して礦業を盛んにし、鐵道電信海運業を建設して以て商業貿易を旺盛ならしめねばならないと彼は考へる。即ち産業の開發、明治の日本に於ける殖産工業である。

薛福成が「強隣環伺謹陳愚計疏」に云ふ所も一に「整武備」であり、二に「濬利源」である。曰く泰西諸國競籌藏富於民之法。然後自治自強措之裕如。(中略)蓋生財大端在振興商務。商務以暢銷土貨爲要訣。欲運土貨以創築鐵路爲始基。

それには購機設廠して織布紡紗・養蠶・繅絲・植茶・焙葉・鍊鐵開煤の法を講求整頓すべきであると云ふ。李鴻章に次いで洋務史上に大なる足跡を留めた張之洞は、その「籌議變法采用西法疏」に西法の採用す可きもの十一條を擧げてゐる。その中王公大官をして海外を視察して見聞を廣からしめ、又海外學

術採用の爲の「廣派游歷」及び「多譯東西各國書」の二條を除けば、他はすべて國防と財政經濟に關する論議である。即ち「練外國操」、「廣軍實」、「修農政」、「勸工藝」、「定路律礦律商律交涉刑律」、「用銀元」、「行印花稅」、「推行郵政」、「官收洋藥」等々。「勸工藝」の條に云ふ。

世人多謂西國之富以商。而不知西國之富定以工。蓋商者運已成之貨。工者造未成之貨。粗者使精。賤者使貴。朽廢者使有用。有工藝然後有貨物。有貨物然後商賈有販運。

故に須らく工藝の振興に努むべく、それには一に「設工藝學堂」て理論と應用を講究し、又工師匠目を養成し、二に「設勸工場」即ち博覽會を開催してその工巧を競はしめて進歩を圖り、三に「良工獎以官職」て獎勵を加へ、以て工業の進展を圖らねばならないと云ふ。又胡燏棻は「條陳變法自強疏」に疏して云ふ。

目前之急。首在籌餉。次在練兵。而籌餉練兵之本源。尤在敦勸工商廣興學校。

以上の如く洋務論は軍備充實と國防強化、産業開發と財政整頓を根本の基調として居り、その擧ぐる所は陸海軍の整備、兵器製造、鐵道・電信・郵便の敷設、礦山開發、機械工場開設等であつて、這般の諸施設を以て富強の根本となすことは何れも同様である。

以上の改革論が具體的にはいかなる成果を齎したかを概略についてみるに、<sup>(1)</sup>軍需工業方面では同治元年曾國藩が安慶軍械所を、李鴻章が上海蘇州製鐵局を開設せるを嚆矢とし、以後李鴻章によつて江南・天津・金陵各機器局が、左宗棠によつて福建船廠・機器局と甘肅機器氈呢廠が、丁寶楨によつて四川機

器局が開設され、礦業では李鴻章によつて開平礦務局・熱河四道溝銅礦・黑龍江漢河金礦が、張之洞により漢陽鐵政局が開かれ、一方李鴻章は光緒初年より海軍建設に着手、鐵甲艦二隻鋼甲快船一隻を初め各種軍艦を英獨兩國より購入して光緒十四年北洋海軍成立し、彼によつて光緒六年以後數年間に沿海沿江諸省に電信が敷設された。又産業交通方面では李鴻章によつて上海紡織總局・輪船招商局が、張之洞によつて廣東に繅絲局・機器制錢局・銀元局・織布局・武昌<sup>三</sup>に織布・紡紗・製麻・繅絲四局が開設されて居り、學堂の開設されたものに曾國藩の上海武備學堂、李鴻章の上海廣方言館・天津水師及び武備學堂、左宗棠の福建船政學堂、張之洞の廣東水陸師學堂・南京陸軍學堂・湖北武備學堂・湖北自強學堂があり、又曾國藩・李鴻章は同治十一年より四年間に百二十人の幼童を米國に留學生として送り、李鴻章は光緒二年陸軍學生七名を獨逸へ、又光緒二年七年十一年に福建船政學童學生五十七名を英獨佛三國國に送つて海軍の事を研究せしめてゐる。

洋務運動が軍備充實と産業開發を主眼として一步もそれから離れなかつたこと、「富國強兵」なる概念に抱含される物的な面のみが特に抽出され強調されたことは以上の事實によつて明かである。例へばここには學堂の開設、留學生の歐米派遣の如き事業もあつた。併し夫は測量、機械、兵學等の軍事的知識技能の修得と陸海軍將校の養成とがその目的の總てであり、廣方言館としても軍事外交に必要な翻譯官を養成する機關であつたにすぎない。一見して廣汎なる文化的意義を有する如き此等の施設も、事實は軍備との關聯に於いてのみ考慮されたに過ぎないのであつて、歐米の近代的政治經濟組織乃至その精神

的文化に至つては殆ど關心の對象とされてゐないのである。それと共に當然の結果ではあるが、此等の多彩な新建設事業の總てが西洋の實用有形の自然科学即ち機器の應用を基礎としたものであることに吾々は氣付くのである。富國強兵の達成とは西洋の「所能所持」を倣行することであつたが、それでは西洋の「所能所持」即ち歐米近代國家が近代及び現代に見る如き富國強兵を達成したその力の本質と源泉とを、洋務論者は如何に理解したのであらうか。

西歐の長所を倣行すべきことを唱へたのは決して曾國藩や李鴻章に始まるのではない。既に南京條約の成立した道光二十二年（一八四二年）に海國圖志を著した魏源はその著に云ふ。

今西洋器械。借風力水力火力。奪造化通神明。無非竭耳目心思之力以前民用。因其所長而用之。即因其所長而制之。

茲に魏源が西洋の長所と考へてゐるのは機器の力であるが、これより三十年後の同治十一年李鴻章は「籌議製造輪船未可裁撤摺」に云ふ。

西人專恃其鎗礮輪船之精利。故能橫行於中土。中國向用之弓矛小鎗土礮不敵彼後門進子來福鎗礮。向用之帆篷舟楫艇船礮划不敵彼輪機兵船。是以受制於西人。

彼によれば西洋列強が富強を致した所以は全くその精利なる鎗礮輪船の力に依るのであつて、道光以來支那が蒙つた屢次の惨敗は一に支那が此らの利器を具備しないからであつた。李鴻章が西洋の「所能所持」と云つたのは、西洋の發達せる自然科学の所産なる兵器輪船機器等を指すのである。更に下つて光

緒中葉頃薛福成は「強隣環伺謹陳愚計疏」に疏して云ふ。

顧臣觀西洋大國。圖治之原頗有條理。英俄法創國數百年。或近千年。炎々之勢不始今日。今其制勝之術屢變益精。舟車則變而火輪矣。音信則變而電傳矣。槍礮則變而後膛矣。戰艦則變而鐵甲矣。水雷則變而魚雷矣。火藥則變而無煙矣。窺敵則變而用氣球矣。照夜則變而用電燈矣。專家之學五彈智力。往々能制馭水火呼吸風霆。新藝迭出殆無窮期。其恃強逞威之具既如此。

彼の云ふ所も同様に西洋科學學への驚嘆であり、それを以て西洋列強富強の基と見做すことは變らないのである。

西洋の發達せる科學こそ舊來の支那に全く見られないものであつて、彼等にとりそれは驚心駭目に價するものであつた上に、阿片戰爭以來支那を壓迫し侵略した列強の軍事的經濟的力、即ち鎗礮火藥輪船乃至は電信鐵道から礦山の採掘・機械工業組織に至るまで、總て此の科學の所産に係る機器の力なのであるから、彼等は西洋科學の優秀性をば切實に感銘せざるを得なかつたわけであり、此を以て西洋富強の根本であると認識するに至つたのも肯ち無理ではないのである。そして差し迫つた列強侵略の脅威を前にして國力の充實を急がなければならなかつた當代の支那に於いて、先づ要求されたものは軍備の充實と産業の開發とであつて、従つて何を措いても科學の採用、機器の應用が富強達成の要務であると思はされたのである。

註一。李文忠公全書。矢野仁一「近代支那史」小島昌太郎「支那最近大事年表」

註二。張之洞が湖廣總督に轉任後、廣東より移轉開設したものである。

三

斯くして、日清戰役前には支那は一應近代の軍備を具有することが出來た。併し該戰役に於ける支那の慘敗は洋務運動にとつては大なる試練であつて、富國強兵がそのモットーであつた以上は夫れは運動の完全な失敗を意味した。戰爭後洋務運動に反對する各々の立場から熾烈な批判が提起され、康有爲等の變法自強運動の展開を見るのであるが、洋務運動失敗の緣由を一言に盡すことは蓋し容易ではない。茲には洋務運動が抱藏せる本質的欠陥と思惟されるものを、戰勝者日本の場合と比較することによつて考察したいと考へる。何となれば、十九世紀後半期に於ける日本と支那は其の當面しなければならなかつた對外的對內的條件に於いて多くの類似點を有するからである。即ち十九世紀中葉迄古い自國の傳統に生きて來た兩國は、歐米先進資本主義列強の壓迫によつて閉國を餘儀なくせしめられたこと、兩國が激烈な國際競争場裡に投ぜられた時には、是れと歐米列強との間には既に比較になら程度著大なる國力の相異懸隔が存し、従つて列強の壓迫と不斷に闘ひつゝ凡ゆる面に於けるその後進性を除去してゆかねばならなかつたこと、更に此の故に支那に於いて洋務運動が推進されつゝあつたと時を同じくして、維新日本の指導者達も富國強兵の旗幟を高く掲げ、近代的軍備の充實と殖産興業による資本主義の育成に熱狂的な努力を傾注してゐたことに於いて、略同様の事情に置かれてゐたからである。

日本は、支那に於いては識者の間にすら叢爾たる島邦として輕視されて來たが、十九世紀末には共に西洋を範とし西法を採用して富國強兵を圖るその立場の相似から、特に臺灣出兵或ひは朝鮮を繞る紛争によつて兩國間の交渉が頻繁となるに伴うて、維新以後の日本の躍進は洋務論者の間に漸次注目を引くに至つた事實がみられる。李鴻章は「議覆中外洋務條陳摺」(光緒五年)に云ふ。

日本國小財匱。其勢原遜於泰西諸國。惟該國近來取法西人。於練兵製器各務刻意請求。頗有振興之象。李鴻章は屢々外交の衝に當つて日本との接觸も多かつただけに、絶えず日本の動向を注目してゐるのであるが、彼が意を留めた點は殆ど日本の軍事的實力の充實發展に限られてゐる。更に日清戰爭直後、胡燏棻はその「條陳變法自強疏」に疏して云ふ。

日本一彈丸島國耳。自明治維新以來。力行西法亦僅三十余年。而其工作之巧。出產之多。礦政郵政商政之興旺。國家歲入租賦共約八千餘萬圓。此以西法致富之明効也。其徵兵憲兵預後備之軍。盡計不過十數萬人。快船雷艇總計不過二十余号。而水陸各軍皆能同心齊力曉暢戎機。此以西法致強之明効也。洋務論者は洋務に於いて富國強兵の物的な面のみを採り上げたと同様に、近代日本の發展を理解する場合にも、軍備や商工業の進歩にのみその緣由を求めやうとしたのである。

併し乍ら、近代日本興隆の眞因をかゝる點にのみ求めんとするは全く皮相の見解と云ねばなるまい。勿論明治の日本が達成した近代的軍備や産業經濟乃至交通運輸等の組織は、日本を近代的資本主義國化するに不可缺の要素であつたには相違ないが、かゝる日本の近代化資本主義化が今日の「世界的日本」

として結實することを可能ならしめた基本的諸要件の存することを看過してはならないであらう。三千年の歴史に裏付けされた國體觀念と國民精神の優秀さは云ふ迄もないが、維新の日本を問題とするとき、吾々は又相繼いで遂行された幾多の政治的社會的變革を想起するのである。即ちそこには幕府の大政奉還と諸侯の藩籍奉還とによつて王政復古が實現し、武士階級が没落して近代的官僚組織がこれに代替し、國民教育制度が計畫されて漸次普及し、かくして天皇を中心とする國家的統一を完成した。更に日清戰役數年前には既に日本は責任内閣制と憲法議會を有する東洋に於ける唯一の國であつた。澎湃として入り來つた自由主義思潮は個人の獨立と創意の尊重とを訓へ、國民を封建的道德の桎梏より解放したのである。維新變革はその歴史的段階のもつ特殊な條件によつて、維新以後と雖も封建制的なものゝ或る程度の殘存を免れなかつたとは云へ、一應近代國家の誕生をみたのであつて、明治以後の富國強兵は實にかゝる基礎の上に達成されたのである。

然るに支那に於いては事情は全く異つてゐたのである。李鴻章初め洋務論者の誰一人として、彼等が實現せんとした軍備や産業の近代化と傳統的な社會機構及び政治制度との關聯について關心を向けたものはなかつた。舊來の封建的社會の持つ諸條件、即ち治安の維持と租税の徴收以外には被治者階級から全く遊離し隔絶された專制絶對的王朝、王朝及び官紳階級の農村搾取の機關としてのみ存在した不合理極まる官僚機構、全く迷蒙のまゝ放棄された國民教育、従つて近代國家に於けるが如き國家意識と國民的統一の完全なる缺除等をその儘にして顧みることなく、此の腐朽せる基礎の上に支那が從來有せざり

し爲歐米列強に比して支那側の不利な條件となれる所の近代的軍備や産業を取入れて、以て列強に比肩するに足る富強を達成し得ると信じたのである。故に梁啓超は李鴻章の洋務を批判して云つてゐる。

吾敢以一言武斷之曰。李鴻章實不知國務之人也。不知國家之爲何物。不知國家與政府有若何之關係。

不知政府與人民有若何之權限。不知大臣當盡之責任。其於西國所以富強之原茫々乎未有聞。以爲吾中國之政教文物風俗無一不優於他國。所不及者惟鎗耳。砲耳。船耳。鐵路耳。機器耳。吾但學此而洋務之能事畢矣。(四十年來中國大事記)

此の批判は他の凡ゆる洋務論者にもその儘當つてゐる。つまり彼等は機器の力を本とした軍備充實と産業開發のみを富國強兵の全部と理解した結果、眞の富國強兵は政治組織や國民の統一社會制度乃至は文化一般に於いても近代化されるのでなければ達成されないことを悟ることが出来なかつたのである。

勿論洋務論者と雖も當時の國內政治に於ける改革の必要を全く認めなかつたのではない。張之洞は「籌議變法整頓中法疏」に云ふ。

竊惟治國如治疾然。陰陽之能爲患者內有所不足也。七情不節然後六氣感之。此因內政不修而致外患之說也。療創者必先調其服食。安其臟腑。行其氣血。去其腐敗。然後施以藥物針石而有功。此欲行新法必先除舊弊之說也。

外患頻りに到るは内治の修らざるが故であり、新法を行ひ富強を致すには先づ舊弊を革めて内を整へなければならぬと彼は考へるのである。立國の要諦は治國が第一であり、「保邦政治非人無由」き故に治國

の根本は人材の養成に在る。張之洞は興學育才こそ洋務の先決要件と見做し、獨逸及び日本の制に倣ひ國民教育制度を建議してゐる。<sup>(註)</sup>即ち州縣に蒙學・小學・高等小學、府に中學、省に高等學校及び農工商礦の四専門學校、京師に大學校を設立するのである。此れによつて人材を育成すると共に内政の改革を行ふのであるが、然らば如何なる改革が必要であるか。「籌議變法整頓中法疏」に彼は次の十二條を擧げてゐる。

- 一、「崇節儉」。宮廷内府の費より官吏の應酬日常生活の節儉。賄賂需索の禁絶。
- 二、「破常格」。官吏の驕惰因循粉飾虛文を正し、奏對の際の直言を奨め、俊才を擢ぶ。
- 三、「停捐納」。捐納任官の即時停止。
- 四、「課官重祿」。俸祿を厚くして清廉ならしむ。
- 五、「去書吏」。地方官場の吏胥の全廢。
- 六、「恤刑獄」。訴訟に當り差役の需索を禁じ、審問を慎み、刑罰を緩くし、衆証を重んず。
- 九、「籌八旗生計」。貧困旗人の救濟。
- 十、「裁綠營」。綠營兵額を裁撤して勇に代ふ。
- 十一、「裁屯衛」。各自屯田の整理。
- 十二、「簡文法」。官場の繁文辱禮を省す。

張之洞は以上十二條を以て「所擬辦法或養民力或澄官方或作士氣」と自賛してゐるのであるが、直に

彼に同することは躊躇される。此等の事項は封建的社會の弊害の極れるものであり、その改革は何れの時代何れの社會に在つても望ましいことに違ひないが、翻つてその改革の實行によつて獲られるであらう結果を考ふれば、封建的社會内部が或る程度清掃されると云ふに過ぎず、其處に残るものは矢張り專制王朝と官紳階級なのである。封建的社會機構と政治組織をその儘にして、本來的に其れに附隨する此等の悪弊のみを除去しうるとなす思惟方法そのものが抑々本質的な誤謬をもつと云はねばならぬ。張之洞の學校教育振興論は日清戰役後の洋務論に共通するものであるが、かゝる國民教育制の普及は社會革新の機運を醸成するに最も有力なる手段であるにしても、その實効をみる迄には多くの歲月を俟たねばならぬ。況や當時の情勢に在つてはその完全なる實施は到底望み得べくもなかつたのである。

斯くして吾々は、進歩主義的改革運動としての洋務運動のもつ本質的性格を知ることが出来る。夫れは封建的舊社會の存續を前提とし、そして或る物（即ち西洋の科學の力）を附加して補強することであり、従つて舊權力に反對する勢力を構成するものでは全くなかつたこと、その限りに於いてその進歩主義は飽く迄封建的社會の埒内に於いてのみ可能であり得たことである。茲に洋務運動の進歩主義運動としての限界性が存したわけであり、此れこそ夫れを失敗に導るた基本的要因であつたと云へる。何となれば、當代支那社會の直面した解決されねばならない本質的な問題は、傳統的舊社會に於ける封建的諸勢力とその地盤を一掃することに存したが、洋務運動の本質は明かに斯かる要請に矛盾し背反するものだつたからである。一見して急進的改革運動の如き相貌を有し、事實保守派から斯く見做されたにも拘

らず、洋務運動の本質が專制權力を維持する爲の補強工作に過ぎなかつたのは如何なる理由に因るのであるか。その根本的要因は、當代支那社會には政治的にも社會經濟的にも發展の必然性が存しなかつたと、即ち封建的社會の變革とその近代化・資本主義化を不可避的たらしむ可き機運が未だ十分に醸成されず、その契機が存しなかつたことに在る。尤も社會内部には幾多の矛盾が尖鋭化しつゝあり、而も清朝政權自體は既に全く腐蝕してその機能を喪失してしまつてゐたのであるから、此れを打倒せんとする反對勢力は農民叛亂の形をとつて既に十九世紀初頭以來活動を始めて居り、特に阿片戦争後外國勢力の侵入を契機として太平天國叛亂に迄發展したのであるが、專制王朝の有力な支柱を形成せる官紳階級によつて鎮壓され、遂に完全な成育を見るに至らなかつたのである。そして最初に述べた如く、舊社會上層部への反對勢力を鎮壓して亂後の國內に事實上の支配者として登場して來た此の官紳階級によつて、洋務が提起され遂行されたことは特に注目されねばならぬ。即ち彼等官紳階級は、外國勢力侵入と國內農民叛亂と云ふ内外情勢の危機深化によつて封建的社會内部の矛盾と腐蝕が完全に暴露された結果、舊社會に於ける階級的支配を維持強化すべく努力し、適々西洋科學の卓越せる機械力にその補強の手段を求めたのであつて、それがつまり洋務運動なのである。

註。張之洞「籌議變通政治疏」

洋務運動は此の様に舊來の封建的社會を否定する運動ではなかつたが、然しとも角夫れは軍備或ひは産業經濟を近代化せんとする運動であり、組織的體系的な一貫せる計畫を缺除したものであるにせよ、部分的には資本主義制度を移植する結果を見乍ら、而もこの運動に於いて採り上げられた部門は實用科學を軍備産業に應用する點にのみ限定され、資本主義制度と表裏一體をなす近代的社會政治組織或ひは學術思想道德等の西洋精神文化は全く無視され、其への扉が何時迄も開かれなかつたことは注目すべき現象である。此は洋務運動の如上の本質よりして當然と云へるが、又一面には運動遂行の衝に當つた官紳階級と儒教主義との緊密不可分なる結合關係に基くものである。

官紳階級とは官僚及び郷紳を含み、紳士と稱せられる特殊の社會的身分を有する支配階級である。舊支那社會は無數の分散せる自治的共同の村落の集合により形成され、歴代王朝の專制絶對主義的支配權力はかゝる社會構造をその客觀的基礎となすが、官紳階級は此等分散の村落に於ける地主層に屬するものであつて、此の故に彼等の中郷紳は村落共同體内部に在つて之を支配し、一方選ばれたる者は官僚として中央政府及び地方行政機構に參與することによつて王朝權力を積極的に支持し、以て王朝及び官紳階級による絶對的階級支配を強化してゐたのである。かゝる支配階級の專制權力を合理化すると共にその永續性への保證を提供せるものが、支配階級に特定の觀念たる王權天命説と家父長主義であるが、儒教主義は此の二つの觀念形態を理論化して其の根幹とし、三代の所謂王道國家を規範とする支那的な社會的政治的原理の體系を構成したのである。所で官紳階級は舊社會に在つては唯一の特權的知識層であ

るが、その學ぶ教養は即ち儒教儒學の知識であり、此の儒家的教養の故に科擧制を通じて彼等は官僚としての政治的地位を獲得する。即ち官紳階級は儒教主義によつて訓育された其の維持者としての知識的特權によつて政治的特權を保證されてゐるのであり、斯くして儒教主義は支配階級の據つて立つ觀念的精神的支柱として役立つてゐるのである。故に儒教主義の神聖性を擁護することは官紳階級の自己保存の本然的欲求であつて、之と對立する如き異質的な原理をば彼等は本能的に拒否せざるを得ない。冒頭の乾隆帝の言葉は詰りは其であつた。

乾隆帝の場合には之れで宜かつた。併し外國勢力侵入と國內農民叛亂とに締めつけられ、專制的支配體制崩壞の危機に直面した同治光緒の官紳階級にとつては、事態は最早「不敢惑於異說」ではすまされない所迄來てゐた。例へ夷狄の學にもせよ、其れを採用して自己の補強を圖るに非ざればその存續を期し難いと云ふ危機への切實な省察は、官紳階級中の進歩的分子を驅つて洋務に趨らしめたのであるが、然らば彼等洋務論者は儒教主義を如何に意識したのであるか。張之洞は「籌議變通政治疏」に疏して云ふ。中華所以立教我朝所以立國者。不過二帝三王之心。法周公孔子之學術。

又一會奏擬請妥議科擧新章並酌改考試詩賦小楷之法疏」に云ふ。

四書五經道大義精。炳如日月。講明五倫範圍。万世聖教之所以爲聖中華之所以爲中。實在於此。歷代帝王經天緯地之大政。宅中御外之遠略。莫不由之。

中國の文化は古代の聖賢によつて創始され、萬邦に神聖比なしとする中華の觀念に於いて、洋務論者と

雖も乾隆帝の言葉に代表された時代の夫れと何等異らないことが知られるであらう。李鴻章が「置辦外國鐵廠機器摺」に

保邦固不基於勿壞者固自有在。

と云ひ、薛福成が「強隣環伺謹陳愚計疏」に、

夫自開關以來。神聖之所締造。文物之所彌綸。莫如中國。

と云つてゐる如く、洋務論者は西洋科學の威力に驚歎しつゝ、而も猶「吾中國之政教文物風俗無一不優於他國」<sup>(三)</sup>と信じて疑はなかつたし、又疑ふことを許されなかつたのである。例へば張之洞は科學制に變改を加へ、八股・詩賦・小楷を廢することを提唱したが、而も彼は四書五經の尊重すべきを強調して云ふ。

行之日久必至不讀四書五經原文。背道忘本。此則聖教興廢中華安危之關。非細故也。其詭誕浮薄務趨風氣者。或又將邪說之說解釋四書五經。附會聖道。必致離經畔道。心術不端之士雜然並進。四書五經本義全失。聖道既微世運愈否。其始則爲惑世誣民之談。其終必有犯上作亂之事。(會奏擬請妥議科學新章並酌改考試詩賦小楷之法疏)

儒教主義的精神が支配階級の觀念的基礎であり、社會的秩序の原理である社會に於いて、その權威が喪失される結果は即ち社會秩序の崩壞であり、王朝及び官紳階級の支配權力の精神的道德的終焉を意味するとすれば、例へ洋務論者と雖も儒教の神聖の侵す可からず、その權威の絶對的なる所以を強調しなげ

ればならなかつたわけである。故に張之洞は獨逸及び日本に範をとつた學校教育制度を提唱するに際しても、「宗旨則不悖經書」<sup>(四)</sup>と云ひ、又「改革大旨總以講求有用之學永遠不廢經書爲宗旨」<sup>(五)</sup>と斷じて、西法を採用するもその根柢は儒敎主義に在らねばならないことを強調するのである。

斯くして、洋務論者と雖もその歴史觀・世界觀に於いて舊來の知識人と本質的には何等差異のないことを知る。併し彼等はいかにやうに儒敎主義の至上的權威を説きつゝ、一方では西洋の學問を採用することの必要を提唱しなければならなかつたのであつて、其處に彼等の當面しなければならぬ矛盾であつた。言ふが如く儒敎が絶對至上のものであり、「中華之所以爲中」であるならば、何の必要あつて西洋の學を學ばなければならぬのか、少く共西洋を學ぶことが正しい道であるか否かは當然問題になる筈である。張之洞は「籌議變法采用西法疏」に之に答へて云ふ。

竊惟取諸人以爲善。舜之聖也。多聞擇其善者而從之。多見而識之。孔子之聖也。是故舜稱大知。孔集大成。

古代の聖賢の言行にその根據を求めて自己の立場を辯護しなければならなかつたのであるが、斯様な洋務論の矛盾を合理化する手段の一として現はれたのが西洋科學の支那起原説である。山西巡撫胡聘之は「請變通書院章程疏」に疏して云ふ。

臣觀西學所以擅長者。特精於天算格致。其學固中國所自有也。(中略)數者六藝之一也。漢魏以降代有專家。至宋胡瑗敎士。其治事一齊。亦以算數分科。是中土敎法本自賅備無遺。且凡西士遞創新法。動

謂中土所未聞者。如地圓地行地轉之說。大戴禮尙書者。靈曜張子正蒙皆言之。鑿々光學軍學。墨子經上經下篇與旨可尋。並在西人未悟其理以前。卽就算術言。西法之借根遠遜中法之天元。後變爲代數。若宋秦九韶正負開方。元朱世傑四元玉鑑。西法終莫能逾。對數爲法絕詣。然推算極繁。自李善蘭著對數探源。省算不啻百倍。突過西人可見。

西洋科學の根源は支那古代に在るとする見解は洋務運動期に入つて發生したのではないが、當代特に組織的となり、一般に行はれたのであつて、斯様な議論を明確に公けにした例に總理衙門の「酌議同文館章程疏」がある。

至以舍中法而從西人爲非亦憶說也。查西說之根源實本於中術之天元。彼西士目爲東萊法。特其人性情縝密。善於運思。遂能推陳出新。擅名海外耳。其實法國中國之法也。天文算學如此。其余亦無不如此。中國創其法西人襲之。中國儻能駕而上之。則在我既洞悉根源。遇事不必外求。其利益正非淺鮮。

西洋科學が支那古代に源を發し、先秦の士大夫階級の必修課目たる六藝の一に「數」が含まれて居り、西洋は支那から學びとつて一層發達せしめたに過ぎないとすれば、西洋の學問を採用しても格別聖賢の教に悖ることにはならないわけであり。斯くの如き傳説の眞僞如何の詮索は別に問題ではない。唯彼等は斯くして自己の聖教の維持者としての名分と、專制權力の觀念的支柱とを擁護することに腐心しなければならなかつたのである。

註 (一)(二)。清水盛光「支那社會の研究」

註 (三) 梁啓超「中國四十年來大事記」

註 (四) 張之洞「籌議變通政治疏」

## 五

儒教主義の神聖なる權威と官紳階級の名分とを動搖せしめることなくして、洋務運動の思想的基礎を正當化すべき、儒教主義と西洋近代文化と云ふ異質的な二個の原理を調和せしめやうとする洋務論者の意圖は、「中學爲體西學爲用」の觀念に到達するに及んで略達成されたと云へる。工部尙書孫家鼐は「議覆開辦京師大學堂疏」に立學の宗旨を述べて云ふ。

中國五千年來。聖神相繼。政教昌明。決不能如本日之舍己藝人。盡棄其學而學西法。今中國京師創立大學堂。自應以中學爲主。西學爲輔。中學爲體。西學爲用。中學有未備者以西學補之。中學有失傳者以西學還之。以中學包羅西學。不能以西學凌駕中學。此是立學宗旨。

同時に軍機大臣・總理衙門の上つた「遵籌開辦京師大學堂疏」の大學堂章程に曰く、  
夫中學體也。西學用也。二者相需。缺一不可。休用不備安能成才。且既不講義理絕無根柢。則浮慕西學必無心得。

「中學爲體西學爲用」の觀念は、固有の儒教主義と新來の西洋文化とのあるべき位置を規定する理念として、一應洋務論の思想的基礎に安定性を與へ得た。休と用即ち主体と作用の相互に相補ふ不可分の關

係に於いて、二つの異質的なものがより高き原理に結合されたからである。

それでは体と用とは具体的には如何なる内容をもつか。張之洞は「勸學篇」會通に云ふ。

中學爲內學。西學爲外學。以中學治身心。以西學應世事。

王之春は「應詔陳言疏」に云ふ。

蓋凡工制義者。其於聖賢道宜中國文理。先已曉然於中。由是而更譯外洋有用之書。進求今世當亟之務。茲では「曉然於中」たるものが体であり、「今世當亟之務」が用である。薛福成は「強隣環伺謹陳愚計疏」に之をより具体的に説いて云ふ。

夫道德之蘊。忠孝之懷。詩書之味。此其体也。而論致用於今日。則必求洞達時勢之英才。研精器數之通才。練習水陸之將才。聯絡中外之譯才。体用兼該上也。体少用多次也。

張之洞の「治身心學」とは王之春の云ふ「聖賢道誼中國文理」であり、薛福成の云ふ「道德之蘊忠孝之懷詩書之味」である。つまり儒教的精神に基く訓育によつて儒教道德の根本である三綱五常の道を体得することを指すものと考へられる。之に對し應世事學とは王之春の外洋書を譯して「求今世當亟之務」ひることであり、薛福成によれば世界の大事勢に通じ、科學機器に精通し、水陸軍事を習得し、中外交渉の任に當り得る知識技能を磨くことである。身心を治める精神的方面では支那文化が卓越して居り、世事即ち軍事外交或ひは産業經濟の物質的方面では西洋を範として學ぶと云ふ通俗的見解に従へば、斯くの如き觀念も傳統文化と西洋文化を調和せしめる論理として一應は成り立ち得たのである。張之洞はそ

の「創立存古學堂摺」に中學と西學と新故相資すべきことを強調して云ふ。

要之。孔子所言溫故而知新一語。實爲千古教育之準繩。所謂故者非陳腐頑固之謂也。蓋西學之才智技能日新不已。而中國之文字經史萬古之磨。新故相資方爲万全無弊。若中國之經史廢則中國之道德廢。

中國之文理詞章廢則中國之經史廢。國文既無而欲望國勢之強。人才之盛不其難乎。

國家社會を維持する爲には、國民道德の淵源たる儒教的精神と教養の保存を絶對不可缺の要件と思惟するのである。

儒教的精神を中核として之を補ふに西洋の知識技能を以てし、かくして完成された人格を新時代に有用な人材と見做すことは、一面には明治の日本に唱へられた「和魂洋才」の觀念と類似した點をもつのであつて、その點に於て儒教主義の尊重擁護は、西洋文化の流入に直面した當代支那知識人の切實なる圖釋保存の叫びとも云へないわけではない。張之洞は「創立存古學堂摺」に云ふ。

竊謂。今日環球万国學皆最重國文一門。國文者本國之文字語言歷古相傳之書籍也。卽間有時勢變遷不盡適用者。亦必存而傳之。斷不肯聽其漸滅。至本國最爲精美擅長之學術技能禮教風尚。則尤爲寶愛護持。名曰國粹。專以保存爲主。凡此皆所養其愛國心思樂羣之情性。東西洋強國之本原實在於此不可忍焉。

自國の傳統的文化的遺産を悉く棄て去り、徒らに新奇にのみ趨るならば、その國家乃至民族の獨自性は喪はれ、深奥にして根柢ある文化の建設を到底望み得ないことも確かに眞實である。儒教儒學は三千年

の間に形成せられた漢文化の精髓であり、尊重すべき文化的遺産であつた。張之洞は「創立存古學堂摺」に云ふ。

中國之聖經賢傳。闡明道德維持世教。開啓神智尊顯鄉邦。因應與日月齊光。尊奉傳習則列朝子史事理博賅。各体詞章軍國資用。亦皆文化之輔翼。宇宙之精華。豈可聽其衰微漸歸泯滅。

誠に彼の「勸學篇」循序に云ふが如く、

今欲強中國存中學。則不得不講西學。然不先以中學固其根柢端其識趣。則強者爲亂首。弱者爲人奴。其禍烈於不通西學者矣。

と云ふ考へ方も一面から云へば全然排斥し得ない眞實さを含んでゐると云へる。唯此の場合問題とされねばならないのは、國粹保存即ち傳統文化を維持し高揚してゆくことが、該民族の生々發展して過まない新しき生命と力の源泉たり得るか否かである。例へばその傳統文化の存するが故に民族の前進と發展とが阻害されるとするならば、國粹保存は發展性ある民族にとり桎梏となるに過ぎないであらう。

この觀點に立つて、當代の儒教擁護運動即ち張之洞の所謂國粹保存の主張を顧みるならば、夫れが全く反動主義的意義しかもたないものであることは前述した所によつて容易に推察される。官紳階級は儒教主義を「文之輔翼宇宙之精華」と絶對視し、之を以て休と爲さねばならぬと考へ、休とは「治身心學」であると規定したが、若し事實儒教が倫理道德の學に嚴密に限定されたものであつたならば、儒教主義の擁護は支那の近代化に當つて格別障礙とはならなかつたであらう。併し現實には儒教主義の本質は、

前述した如く專制權力を觀念的に支持する所に存したのである。故に彼等が國粹保存を唱へた時、彼等が明確に意識して居たか否かに拘らず夫れは正しく封建的舊社會機構の擁護と永續を意味したのであつて、斯くの如き反動的國粹保存が支那の近代化への甚しき立ち遅れを齎したことは吾々の知る所である。

この關係は現代に於ける儒教の運命を思ひ合せる時一層明瞭にされる。上述の如く專制王朝の存立する間はその擁護が叫ばれたが、辛亥革命以後民主主義的社會革命の機運が漸次醸成され來るに伴つて反儒教運動なる思想革命が発生した。例へば陳獨秀は西歐的近代社會の實現を叫び、それはその基礎たるべき人權平等の新信仰を輸入す可く、之と相容れぬ邪教（即ち儒教）を徹底的に排撃しなければならぬと論ずる。<sup>(一)</sup> 此れは分散的共同体的農村社會の解剖と資本主義制の發達の客觀的事實に照應するものであつて、支那の封建的社會から近代社會への變革過程に於いては、必然的に舊社會の支配階級の觀念的支柱であつた儒教主義を徹底的に打破しなければならなかつたのである。併し民主主義革命を經道して民族資本勢力が略確立された（極めて變質的な形態を歪曲された性格をもつてではあるが）蒋介石の國民黨政權時代に入ると、民國二十三年（一九三四年）三月、蒋介石は「總理の根本思想」なる演説の中に三民主義と儒教との合致融和を説いて儒教の「禮義廉恥」「孝悌仁義」等の徳目を強調し、又孔子祭復活や孔子生誕日を國慶日とすることが決定されて尊孔的運動すら起されてゐる。<sup>(二)</sup> 此は即ち儒教主義の據つて以て立脚せる政治的乃至社會經濟的地盤が既に崩壊し、従つて政治的乃至社會的構成原理としての其の

思想的性格が喪はれ、純然たる倫理學的範疇を出でぬものとなつた事實に基くものである。

要するに、洋務運動が官紳階級の手によつて爲された事實は此の運動の政治的乃至社會經濟的基礎を決定して此に致命的限界性を賦與する結果となり、従つて當然夫れは儒教主義の拘束より一步も離脱し得ぬものであり、國粹保存の反動的主張を生むに至つたのであつて、斯の洋務運動の本質こそ支那の近代化を日本に比して甚しく緩漫ならしめた所以であると云はなければならぬ。

註 一。神谷正男「近代支那思想とその特質」(近代支那思想)

註 二。山田厚「支那哲學界の現状」(同上書)